

## 実家の家宝

ハルキ

これは、僕が大学三年生の時体験した、奇妙な出来事です。

僕の実家には不思議な家宝がありました。小さな鏡「想像」と書かれた紙が貼られた小さなお面、粘土で作ったような頭蓋骨の三品が入っている木箱を家宝として、一年に一度お盆の時期、その木箱に頭を下げる事を恒例行事としています。

でも、家族のどれも家宝の詳細について知らないのです。判っている事は、中国にルーツがあるらしい事と、お面は生きています、頭蓋骨は死者(?)を表している事が分かっています。でも、どうしてうちが持っているのか、「想像」と書かれた紙は何なのか、だれも知らないのに、なぜか必ず拜まなければならぬ気がして、みんなお盆に頭を下げるんです。

大学三年生の夏、バイトやイベントが重なり、お盆に帰省できませんでした。少し遅れて帰省した日の夜、僕は父と晩酌しながらいろんなことを喋っていました。

トイレに行きたくなり、用を足して茶の間に戻る途中に「あれ」はやってきました。

僕が庭に面した廊下を歩いていると、庭を何かが歩いているような音がしました。誰か来たのかと思い、庭を見に行きました。実家の庭は木が生い茂り暗く、内心怖かったです。庭に出て「あれ」が見えた瞬間、恐怖のあまり動けなくなりました。そこには体がドロドロに溶けたような、人間に似ても似つかない見た目をした生き物がいました。慌てて茶の間に行き、両親に今見たものを伝えました。

そこからは記憶があいまいなのですが、両親は僕があまりにも動揺しているので、翌日お寺の住職にお祓いをお願いしたそうです。そして翌日、気づいたらいつの間にか終わっていました。どうやら「あれ」の正体は例の木箱に原因があるらしいので、あの木箱はお寺に預けることになりました。

ところが、先日お寺に空き巣が入り、あの木箱がなくなつたそうです。何も起こらなければいいのです  
が・・・

終わり